

高崎元尚新作展 —破壊COLLAPSE— MOTONAO TAKASAKI 2017 COLLAPSE

97
2017年7・8・9月

チ！ムラボ
踊る！アート展と、
学ぶ！未来の遊園地

8.5土→9.24日
9:00-17:00 (入館は16:30まで)

前売券：一般1,300円／中高生800円／3歳～小学生500円
当日券：一般1,500円／中高生1,000円／3歳～小学生600円
※小学生以下は保護者同伴

家族で楽しめる「学ぶ！未来の遊園地」が美術館に出現！

自分で描いた魚たちが水族館で泳ぎだす
《お絵かき水族館》ほか、全国各地で大人気の
体験型4作品も一挙公開します。

シャガールが、その長い創作活動の最終段階において制作した挿画本《オデュッセイア》は、代表作《ダフニスとクロエ》と同じ古代ギリシアを舞台にしているが、そのテキストは《ダフニス》の牧歌的な世界とは隔絶した、欺瞞と殺戮の物語である。ギリシアの神々をも巻き込む大戦役であったトロイア戦争の後日談であるから、暴虐の影は全編に立ち込めている。したがって、南欧の白日のもとで繰り広げられるこの物語に付された挿画は、やはり凄惨な描写が含まれる「聖書」などよりも、はるかにむごらしいはずだ。ところが、御年87歳であった老画家の手に成るこの作品のイメージは、誠に穏やかなものである。

主人公オデュッセウスはトロイア戦争で武功を立てたものの、海神ポセイドーンの怒りを買ったために10年の長きにわたる放浪を余儀なくされ、ようやく帰還を果たした。そのとき、妻ペーネロペイアは実に40人の求婚者に言い寄られていたのである。剛腕のオデュッセウスは得意の弓矢で求婚者たちを皆殺しにしてしまうのだが、今回紹介している作品はまさにその場面。文字どおりの修羅場が、ご覧のとおりの牧歌的情景。シャガールが最晩年に到達した、逸楽の境地をご堪能いただきたい。

文◎奥野克仁（当館学芸課長補佐）

デジタル彌留を中心で開催する
ウルトラテクノロジスト集団チームラボがついに高知初上陸！
昨年東京の森美術館で公開され話題を呼んだ作品の新バージョン
『追われるカラス』、追うカラスも追われるカラス、
そして超越する空間は日本初公開です。

不思議な浮遊感を体験できます。

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI
〒781-8123 高知市高須353-2 TEL088-866-8000 FAX088-866-8008
<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/museum>

[表紙図版]ギャラリー16(京都)にて作品制作中の高崎元尚(1979年)
[発行]高知県立美術館 [発行日]2017年7月10日 [デザイン]タケムラデザインアンドプランニング

追われるカラス、追うカラスも追われるカラス、そして超越する空間



著作権の都合上、表示できません

オデュッセイア

マルク・シャガール

初版:第1巻1974年、第2巻1975年
出版者:フェルナン・マルロー
リトグラフ 全82点

本号にて特集しました高崎元尚先生におかれましては、6月22日に永眠されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記 Editor's note

今夏も美術館は、子どもから大人まで楽しめるイベントが盛りだくさん。高知のギラギラと刺さるような日差しに疲れてしまった時は、ぜひ美術館に涼みにいらしてくださいね。

編集担当◎朝倉芽生（当館学芸課）

[表紙図版]ギャラリー16(京都)にて作品制作中の高崎元尚(1979年)

[発行]高知県立美術館 [発行日]2017年7月10日 [デザイン]タケムラデザインアンドプランニング

追われるカラス、追うカラスも追われるカラス、そして超越する空間

**インドネシアの現代人形劇カンパニー
ペーパームーン・パペット・シアターが帰ってくる!!**

共同芸術監督・演出家マリア・トリ・スリスチャニさんへのQ&A

2015年に親子で楽しめるワークショップと公演が好評を博したペーパームーン・パペット・シアター。
今夏、メンバーが高知で地元アーティストと共に創作に取り組み、新作公演を行うことが決定しました！

Q 初めてカンパニーのメンバー8人全員が揃って日本にレジデンスするので、高知の5人の地元アーティストも加わってみんなで協働することとても楽しみにしています。
今回参加してくれる高知のダンサーやバイオリニスト、作曲家のみなさんにとって新たな経験だと思いますので、彼らがどのように人形劇とコラボするのかワクワクしています。観客のみなさんの心を動かす作品と一緒に創りたいです。
また高知に行くのがとても待ち遠しいです。早くみなさんと会って、「物語」を分かち合いたいです。

Q 新作「和紙を透かして」は、新作のような作品ですか？
前回の2015年の滞在中に、高知のとても美しい村にある伝統的な和紙の製紙所を訪れました。何時間もかけて職人さんが和紙を漉いている様子を見学し、様々な紙を触らせてもらう中で多くのアイデアを得ました。刺激のままに、人形遣いが和紙を使ってパフォーマンスを創ったらどうなるのか…。
今回は、和紙の特徴や職人さん、和紙を使う人など、和紙にまつわる様々な“物語”を作品にしたいと思っています。

**アーティスト・イン・レジデンス2017&公演
ペーパームーン・パペット・シアター新作人形劇
「和紙を透かして」**
7月27日(木)19:00 7月28日(金)①14:00 / ②19:00
前売2,000円／当日2,500円
学生1,000円、4歳～小学生500円(前売・当日共)
撮影:深田名江

高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2017 at 美術館ホール

9月16日(土)・17日(日)
両日とも19時開演
※16日はアフタートーク付

「キス＆クライ」
KISS & CRY (日本語吹替版)
文◎松本千鶴(当館企画事業課)

ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)
ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)
ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)

映画？舞台？ 目の前で映画の誕生に立ち会う90分
Photo: Maarten Vanden Abeele

ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)
ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)
ミシェルビジャコ(5月末ヘルギー・ブリュッセルにて)

高崎元尚新作展

—破壊COLLAPSE—

MOTONAO TAKASAKI 2017 COLLAPSE

土佐中学・高等学校教諭として教員生活を続けながら独自の創作活動を展開し、
自らの信念のままに「前衛」を貫いてきた高知市在住の現役美術家・高崎元尚(94)。
ここでは70年を超える高崎の活動を過去の作品から振り返り、その作家像に迫ります。

文◎中村麻莉(当館学芸員)



《朱と緑》1959年、当館蔵



《作品》1961年、当館蔵

1952~

絵画との格闘

1949年に東京美術学校(現在の東京藝術大学)を卒業し、1952年に帰郷した高崎は、長方形や半円といった幾何学的なかたちをフラットな色面で構成した油彩画のシリーズ《朱と緑》を取り組みます。その後1958年に東京国立近代美術館で開催された「抽象絵画の展覧会」展で同シリーズを出品しますが、同じくこの展覧会に出品した画家、今井俊満による激しく奔放な筆致と重厚な絵肌の抽象画に衝撃を受け、自らの制作手法の再考を余儀なくされました。61年の《作品》はそうした模索期に制作されたものです。制作時の画家の身振りのものを示す、画面を縦横無尽に走る線の痕跡は、同時代に世界的に台頭した「熱い抽象」に対する高崎なりの応答でしょうか。

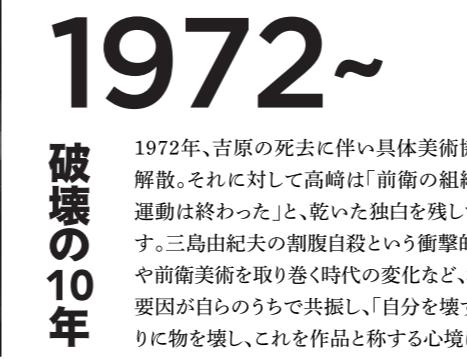
1963

《装置》の発明

正方形に切り取った白いキャンバス片を、黒い板に貼り付けた高崎の代表シリーズ《装置》。50年代の試行錯誤を経て高崎が「発明」したという《装置》は、本人の言を借りると「自身の持つデータをインプットして演算增幅された己自身に対面することを可能にする機械」といいます。置かれた環境の温湿度に呼応して周縁部がめくれ上がり、微妙な差異が生じるキャンバス片の集積は、その外観の美しさもさることながら、様々な解釈を可能にするとして高い評価を獲得しました。63年の東京での個展で発表したことを皮切りに、《装置》は様々な展覧会に取りあげられています。



《装置》1994年(1963年の再制作)、当館蔵

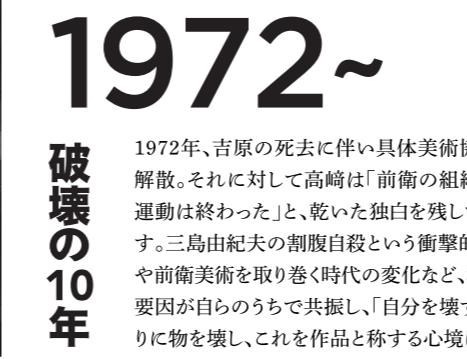


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1965

具体美術協会への参加

高崎が、吉原治良率いる関西の前衛美術グループ「具体美術協会」のメンバーと接するきっかけとなったのは、「第一回ジャパン・アート・フェスティバル」に先立って65年に東京国立近代美術館で開かれた「日本芸術祭国内展示」でした。吉原に受け入れられ協会の一員となった高崎は、その後の具体展にも積極的に参加します。68年の第21回具体美術展ではじめて展示した《密着》は、薄い鉛板を凹凸のある壁や柱、床に叩きつけ、その基底の形状をうつし取るように貼り付けて密着させるという新規性と遊び心に富んだインスタレーションでした。



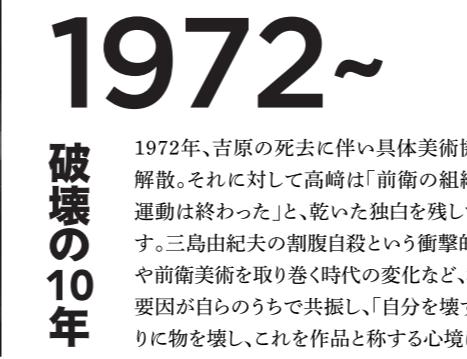
《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1972~

破壊の10年

1972年、吉原の死去に伴い具体美術協会は解散。それに対して高崎は「前衛の組織的な運動は終わった」と、乾いた独白を残しています。三島由紀夫の割腹自殺という衝撃的事件や前衛美術を取り巻く時代の変化など、様々な要因が自らのうちで共振し、「自分を壊すかわりに物を壊し、これを作品と称する心境に立ち至った」という高崎は、同年に京都市のギャラリー16において、積み上げた黒塗りの段ボール箱を梱包用のテープで締め上げたうえで破壊。引き裂いた段ボール片でギャラリー内を埋め尽くし、《LANDSCAPE》と題して発表します。その後も、大量の石膏製のゴルフボールを碎いて床中に配した京都市美術館での《ゴルフボールの使い方》(1974年)、木を等間隔に切ったまま床に並べるという《TREE》(1976年)など、《破壊》シリーズは10年にわたって展開されました。

高崎は《破壊》において、破壊の後に出現する壊されたモノの累積風景だけでなく、モノを破壊する過程をも作品化することを試みているかのようです。1978年に兵庫県立近代美術館で発表した《COLLAPSE》では、大量のコンクリートブロックを床一面に敷き詰めたうえで金づちで叩き割り、鑑賞者にその上を歩くように促しました。作家の手を離れた後も鑑賞者の歩みによって刻々と崩壊を続け、表情を変え続ける《COLLAPSE》の在り様は、芸術に対するさまざまな問いかけを内包するものでした。

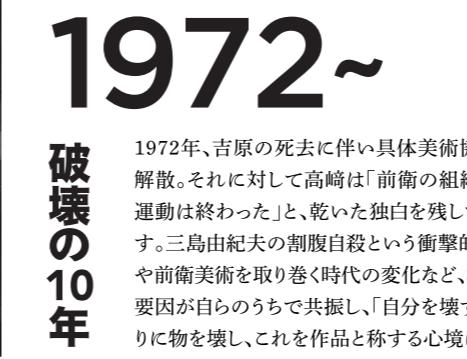


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

1980年代の半ば頃からは、ゴムや塩化ビニールといった柔軟性のある素材を用いた《不能》と称する一連の立体作品の制作に着手。衰えぬ創作意欲のままに新作を発表し続けています。また、2013年にニューヨークのグッゲンハイム美術館で開催され、具体美術協会の再評価の機運を決定づけた展覧会「Gutai: Splendid Playground」に《装置》を出品し、その存在を国内外に示しました。

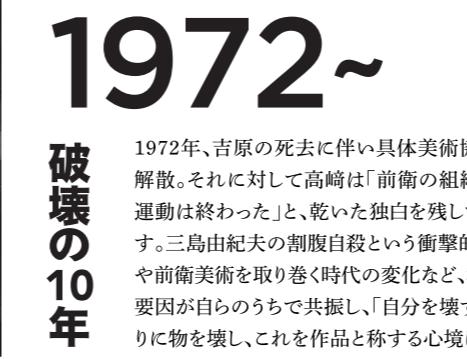


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

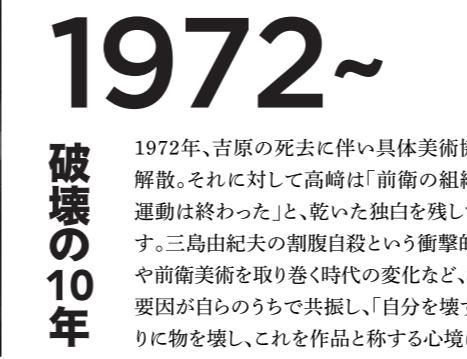


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

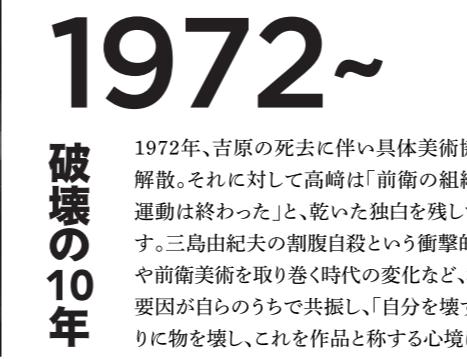


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

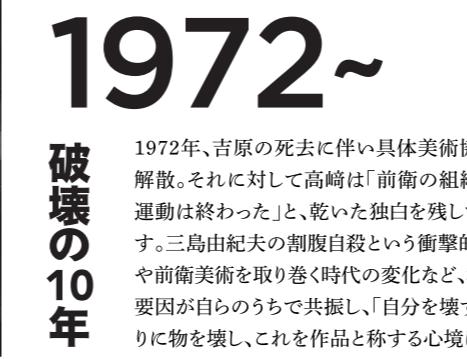


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

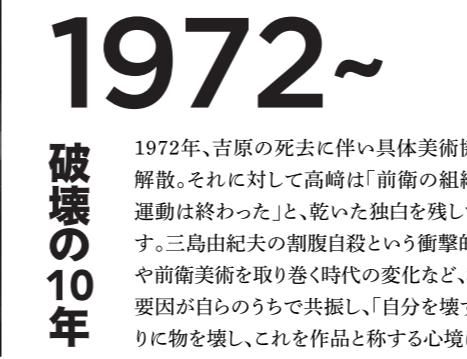


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

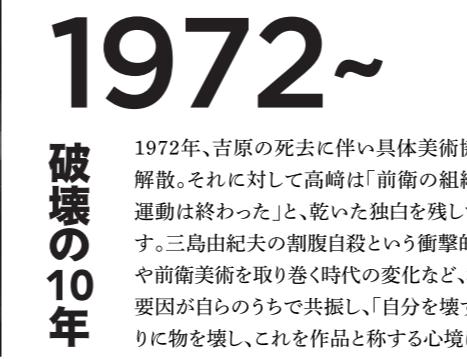


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

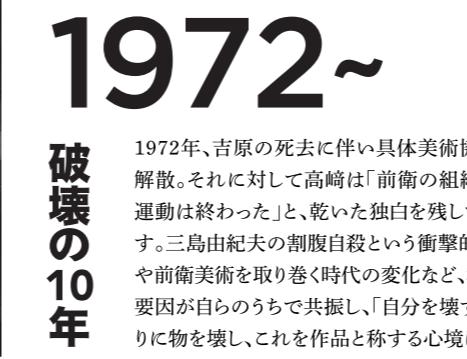


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

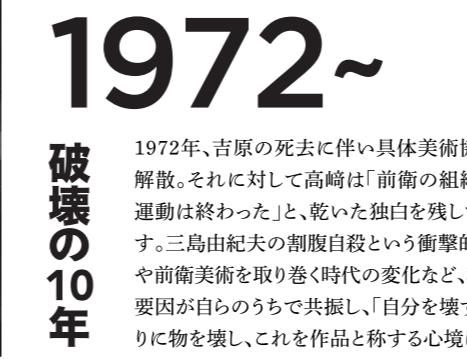


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

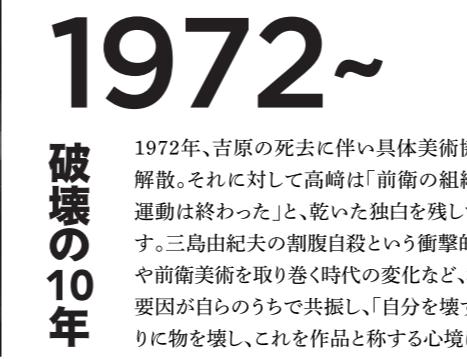


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

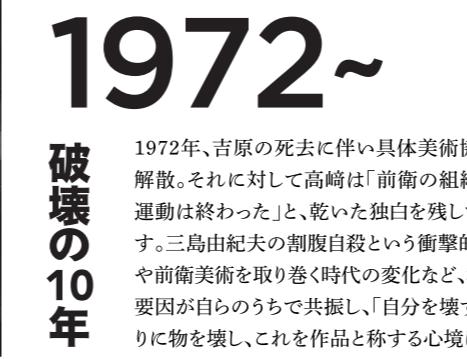


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

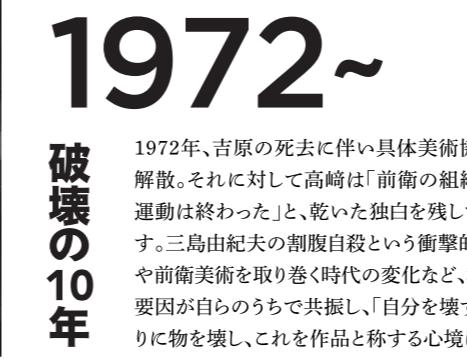


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

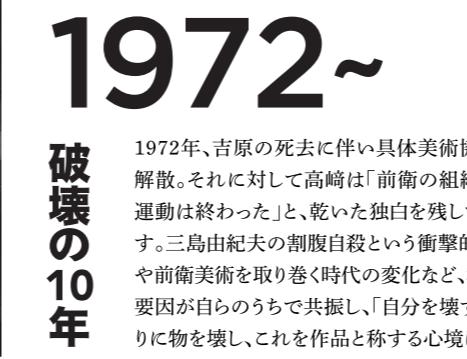


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

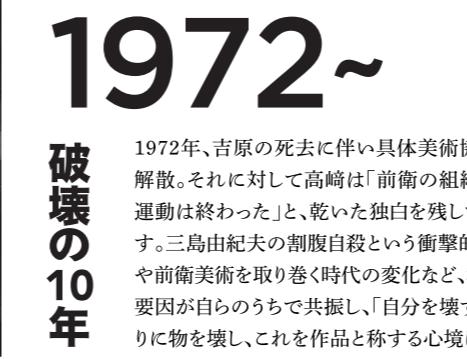


《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。



《密着》1970年(万国博みどり館〈エントランスホール〉グタイグルーブ展示での展示風景)

1983~

新たな展開

「誰もやらないことをやる」を信条に、日本の戦後美術界を走り続けてきた前衛美術家・高崎元尚。本展では、70年代の《破壊》シリーズに連なる新作を中心とし、新たに姿を現す《破壊》は、2017年の現代を生きる私達の目にどのように映り、どのような体験をもたらすのでしょうか。

